

レヴィナスの《essence》宣言の意図に関する仮説

川崎陸央*

序論

本研究ノートの目的は、「レヴィナスは『存在するとは別の仕方、あるいは存在の彼方へ』（以下、『存在するとは別の仕方』）の前置きにおいて、『存在すること』という意味で《essence》という語を使うことを宣言しているが、その宣言の背景にはどんな意図があったのか」という問いに対して、本書および同時期に書かれたレヴィナスの諸論文の読解を踏まえ、一定の仮説を立てることにある。

第2章第1節、つまり第1章（梗概）に続く本論の始まりにおいて、レヴィナスはハイデガーを意識しつつ、存在論的差異について以下のように言及している。

存在と存在者のうち真理にとって決定的なものとなされてきたのは、存在者ではなく存在であった。しかるに、存在と存在者との区別は存在と存在者との両義性でもあり、したがって、究極的な事態を表してはいない。存在と存在者との差異が<語られたこと>のうちで、言葉のうちで現出するとするなら—この現出は単なる付随現象ではない—、また、存在と存在者の差異がこのような顕出に由来するとするなら、この差異は存在そのものと次元を同じくすることになる（Levinas 2004/1999: 43/67）¹。

* 上智大学大学院文学研究科哲学専攻（博士前期課程：2024年4月より）

電子メール：rikuo.kawasaki@gmail.com

¹ 本稿において、日本語訳が存在する海外文献を引用する際には、（著者名 原著発行年/和訳発行年：原著該当ページ/和訳該当ページ）という形で引用部を示す。直前の引用部と同じ文献を引用する際には、（Ibid.：原著該当ページ/和訳該当ページ）と表す。該当ページ数も直前と同じである場合は、単に（Ibid.）とだけ示す。

＜語られたこと＞のうちで存在と存在者との差異が現れ、さらにその差異が「究極的な事態を表してはいない」とはどういうことか。この問いについて、ジャン＝リュック・マリオンは、本書「前置き」において宣言された«essence»という語に触れつつ、次のように説明している²。

マリオンが注目しているのは、『存在の彼方へ』の前書きに書かれた以下の宣言である。

「本書で用いられた《essence》（存在すること）という語は、存在者〔存在するもの〕から区別された存在〔存在性〕を表しているのである」（Ibid.: 9/7）。

通常《essence》という単語は「本質」という意味で用いられるが、本書においてこの単語は「フランス語で言うと《étant》とは異なる《être》を、ドイツ語で言うと《Seiendes》から区別された《Sein》を、ラテン語で言うとスコラの《ens》から区別された《esse》を」（Ibid.）表している。

また、「言語史的に鑑みると、ラテン語の《antia》ないし《entia》から派生したフランス語の接尾辞《ance》が表しているのは、行為を示す抽象名詞であり、それゆえ、存在することという《essence》の含意を浮き彫りにするために、思い切って《essence》を《essance》³と書くべきだったかもしれないが、そうはしなかった」（Ibid.）とあるが、マリオンが指摘している通り、実際には《essance》と書かれてある箇所も散見される（Marion 1993/1997: 49/87）。

したがって、«essance»ならぬ«essence»は、「本質」という通俗的な意味だけでなく、単なる静的な存在者とは区別される、動詞的な「存在すること」の性質

² ジャン＝リュック・マリオンは、かなり早い段階からレヴィナスにおける存在論的差異の解釈の問題を扱った研究者の一人である。彼は1977年の著書『偶像と隔たり』で、すでにこの存在論的差異について「存在の上に存在者が張り出すだけでは十分でない。なぜなら、この張り出しは、依然としてそれなりの仕方では存在論的差異を前提としているからだ」（Marion 1977: 278）と述べている。

この指摘に対してレヴィナスは、『実存から実存者へ』の第二版に付けられた序文において「存在者同士の関係の中に『終わりつつある形而上学』とは別のものを見てとることは、ただ単に名高いハイデガーの差異の両項を転倒して、存在の代わりに存在者を特権化することを意味するものではない。この転倒は、存在論的差異を越えた意味—おそらくそれが、とどのつまりは＜無限＞の意味に他ならない—を意味することになる、存在よりも古い倫理へと開かれた最初の一歩なのだ」（Levinas 2002/2005: 12/13-14）として、マリオンに同意しつつ、『全体性と無限』から『存在するとは別の仕方へ』への理論的深化を自ら確認している。

レヴィナスのマリオンへのこのような同意・承認を踏まえ、本稿ではマリオンによる存在論的差異と「存在論的差異を越えた意味」の理解をいったん受け入れる形で«essence»の宣言の戦略について考察を進める。

³ 《essance》はラテン語の《ens》と接尾辞の《ance》の組み合わせであり、それゆえに原義的には「存在すること」を意味する。

を表現するための言葉であると解釈できる。

とはいえここまでの分析は、「存在論的差異に一つの名前 [エサンス] を与えた」(Ibid.)という事実の確認に過ぎない。より根源的な問題は、この《essance》ならぬ《essence》の宣言において、いかにして存在論的差異が生起しているかであり、その実際のあり方を問うことである。

またマリオンは、《essance》ならぬ《essence》は「レヴィナスが「存在と存在者の両義語法 (amphibologie de l'être et de l'étant) と名付けた事態の全体を意味」(Ibid.) していると指摘し、存在論的差異はその「両義語法」によって根源性を失い、全く別の差異を暗示していると主張している。

マリオンの指摘に従えば、「存在すること」としての《essence》の使用によってレヴィナスは、存在論的差異を単に示すためではなく、その差異を抹消し別の差異を忍び込ませようとしていることになる。では、彼はなぜその戦略の実行において《essence》という言葉を選んだのか。明確な理屈づけなしに、レヴィナスが《essence》をそうした複雑な構造を持つ記号として措定したとは考えにくい。だとすれば、《essence》はいかにして、どのような点において、存在論的差異と、それとは別の差異の提示となっていると言えるのか。「<語られたこと>の中でいかに存在論的差異が現れるか」は、根源を辿るとこの問いに帰着する。

マリオンの指摘に沿って考えれば、《essence》には存在論的差異だけでなく、それは別の差異—マリオンが「倫理的差異」(Ibid.: 52/89)と呼ぶ、「存在するとは別の仕方」に向かう差異—が暗示されていることになる。だとすれば、本書『存在するとは別の仕方』におけるレヴィナスの企ては、前置きに書かれてある《essence》という言語用法の戦略に端緒を持つと言える。そこで本稿では、上記に掲げた《essence》への問いを考察し、『存在するとは別の仕方』におけるレヴィナスの思想の源泉を理解することを目指す。

このような研究背景・目的を踏まえ、本論は以下のような形で展開する。

まず第1節で、日常的には「本質」という意味で使われる《essence》という単語の中にレヴィナスが「存在すること」という意義を含ませた意図を考察する。続く第2節で、レヴィナスがデリダの「暴力と形而上学」を踏まえつつも、《essence》を《essance》とは敢えて表記しなかった意図—レヴィナスとデリダの距離感—を解釈する。第3節では、デリダとは異なる「差異」—「倫理的差異」—が何であるかを明らかにする。第4節では、「存在すること」における「倫理

的差異」は「存在の誇張」から生起することを示し、その「誇張」の具体的な3つの位相について、リクールの読解を基に整理する。最終第5節では、《essence》（存在すること＝本質）が、いかにして「誇張」の3つの位相へと至るかについて仮説を提示する⁴。

第1節 <大地>への休息としての「存在すること＝本質」

本節では、「存在すること」と「本質」のダブルミーニングとして《essence》をどう理解すべきか、なぜレヴィナスは「存在すること」を指し示す言葉として、通常は「本質」を意味する《essence》を用いたのか、その点に関する一解釈を提示する。

そもそも《essence》という言葉は、ラテン語の《essentia》、ギリシア語の《ousia》に由来している。《ousia》は元々「人が所有するもの、財産」という意味だったが、アリストテレスによって「実体」として意味づけられるようになったとされている（土橋 2009: 27）。

とはいえ、アリストテレスにおいて、《ousia》が「実体」だけを意味していたわけではない。野村（2022）の整理によれば、《ousia》は《substance》（実体＝個体）と《essence》（本質＝<種>または<類>、形相）の2つの意味を持つ言葉として規定されていた（野村 2022: 66-67）。

重要なことは、《ousia》という言葉の中で、「実体」（substance）と「本質」（essence）の区別が確認されたという点にある。『カテゴリー論』において《substance》は「第一実体」として想定され、《essence》は「第二実体」とされた（Ibid.: 62）。

アリストテレスによって本質ないし形相から区別される実体そのものの存在が証し出され、中世以降《ousia》には、《essence》＝本質から区別される形で、「実体」という訳語・意味が定着していくことになる。その過程の中で、《essence》＝本質の方は、当の実体から独立し、「神」という超越者の名のもとでそれ自体が

⁴ 周知の通り、レヴィナスの言語・記号使用については既に多数の先行研究がある（例えば Cornelle (1992)、Davis (1996)、関根 (2007)、吉永 (2016)）が、本論ではそれらの詳細なサーヴェイには踏み込まない。本論はレヴィナスの《essence》という宣言の戦略・意図についての考察である以上、まずはレヴィナス自身の著作群を詳細に読解し、その主張を整理しなければならないからである。その上で、この研究によって得られた仮説を先行研究史の中に位置付け、その関連の中で仮説を検証・更新することが、本論執筆後の研究課題となる。

一つの存在者として位置付けられるようになった。「本質存在」(essentia)と「事実存在」(existentia)が、それぞれ独立した存在者として想定されるようになったのである(有馬 2022: 102-103)。

「本質」と「実体」とを峻別するこの態度について、ハイデガーは「存在は被制作性(Hergestelltheit)であるとする古代ギリシアの存在了解」(Ibid.: 104)が忘却されていると指摘している。

«existentia»という言葉はギリシア語の«energeia»と関わっており、この言葉の中にある«ergon»は「作品」を意味するがゆえ、«energeia»は「作品のうちに現れている状態」を意味するようになる。他方、«essentia»はギリシア語の«idea»や«eidos»、«morphe»と関わっている。これらの単語はプラトンおよびアリストテレス思想の鍵語だが、彼らがこれらの言葉を使う際、そこには事物の制作モデルが想定されているとハイデガーは指摘する。それゆえ「本質」存在も「実体」と同様に制作への依拠が前提とされている。

しかしながら、この「制作」という存在の地盤が中世以降は忘却され、「本質」は「実体」から隔離されて想定されるようになった。ハイデガーはこのことを批判し、「制作」—ハイデガーにおいては「日常性」—という「自らの経験に対して開かれた眼、いわば現象学的方法への適用」(Ibid.: 105)の重要性を指摘している。

レヴィナスは存在に対する現象学的解釈の多くをハイデガーから(批判的にはあるが)継承しているので、忘却されてきた存在そのものの経験の現象学的方法の適用についても、ハイデガーと同様に重要視していると想定される。そこで以下では、「存在の思考と他なるものへの問い」におけるレヴィナスの«essence»解釈を通して、「存在すること」をめぐる経験のあり方を整理し、「存在すること」と「本質」の間にある密接な関係を明らかにする。

「存在の思考と他なるものへの問い」の冒頭においてレヴィナスは、哲学の思考の根源を以下のように問い直している。「なにかが『分かる』とはどういうことなのだろうか。意味の意味とはなんなのだろうか」(Levinas 2000/1997: 173/213)。

意味することの起源についての問いは、哲学にとって最も根源的な問いである。哲学—少なくとも伝統的な観念論哲学—は、あらゆる意味生成の起源を、あらゆる合理性の根源を「存在」に求めてきた。

意味は、常に何らかの土台の上に現れる。明証な存在の現前であれ、不在や無の現れであれ、肯定や否定の判断に先立つような土台の上に、あらゆる意味が生じる。

意味にとっての土台とは、意味を受け止めるようなく私>の存在の定立である。ただしこの存在は、何らかの静物としての存在者からは明確に区別される。その存在とは、レヴィナスが《essance》「=存在すること/本質」という言葉の中で、動詞的な相を表現する《a》を用いて表しているように、優れて動詞的ないし動的な出来事を指す。レヴィナスが「大地」(la terre)と呼ぶ、「全ての土台の中で最も堅牢な土台の上に *sur un terrain ferme, le plus ferme des terrains*」(Ibid.: 175/214) 自らの場所を見出し、その上に「休息 *repos*」(Ibid.)すること。存在することとは、いかなる運動、いかなる表象の変化においても変わることのない、根源的な休息=静止 (*repos*) の運動である。

現象学において、意識は常に何かに対しての意識であるが、意識が何かへと向かう志向性の運動がいかなる形で果たされるにせよ、その運動の前提となる経験—意識を持ち、自らを定立するという経験—がなければならない。この運動をレヴィナスは「休息」としての「存在すること」と呼び、それがあらゆる意味の本質であるという点において、《essence》という表現を採用している。

以上を端的にまとめれば、《essence》とはあらゆる意味の「本質」であると共に、その「本質」の場としての「存在すること」—自らの「大地」への定立、休息、場を持つこと—であると言える。「実体」であり「本質」であるという《ousia》の意味は、<私>の大地への定位・休息という出来事において、現象学的に掬いだせるのである。

第2節 デリダの「現前の形而上学」批判と、レヴィナスによる再批判

前節では、「存在すること」であり「本質」である《essence》の字義について確認した。本節では、この《essence》の宣言の背後にある、レヴィナスとデリダとの関係—デリダの指摘をレヴィナスがどのように理解し、どのようにデリダから距離を取ったか—について整理する。

服部敬弘の整理によると、デリダによる最初のレヴィナス論考「暴力と形而上学」において指摘された問題は、以下の2点にまとめられる(服部 2022: 201)。

1点目は、レヴィナスが乗り越えようとする「ギリシア的ロゴス」（＜同＞の暴力性を含んだ言語）なしに＜他人＞について語ることの矛盾についてである。レヴィナスは、主に『全体性と無限』でギリシア的ロゴスに回収されない言表不可能な絶対的他性である＜他人＞を救い出すことを試みた。だがデリダは、「顔」として表出する＜他人＞には既に＜同＞の暴力性が刻印されているのではないかと問いただしている。

2点目は、存在論から脱出しようとするレヴィナスの企図が、当の存在論によって予め規定されている可能性についてである。＜他人＞は定義上、ギリシア的ロゴスと絶縁しているにもかかわらず、その記述に当たっては、当のロゴスが前提にされる。それゆえ、存在論と（その超越としての）倫理は、既にして共犯関係になっているのではないかとデリダは述べている。

上記2点を踏まえてデリダは、レヴィナスの「顔」は、言語を介さず「経験」として記述されるものであり、レヴィナスが手を切ったはずの「現前の形而上学」なしにその経験主義を維持することは困難であると指摘する。

デリダの批判に対してレヴィナスは、一定程度それを受け入れつつも、明確に立場の違いを表明している。

1点目の批判については、後に「エマニュエル・レヴィナスからジャック・デリダへの2つの手紙」としてまとめられた私信の1枚目「1964年10月22日」と印字された小論にて応答している。そこで彼は、「言語は、発話によって妨げられることない（振る舞いである）言語の呼びかけにおいて、思考それ自体の彼方の思考を運んでくる」と指摘し、「思考の彼方」は、フッサールの言うような直観による志向の充実には汲み尽くせない「謎」（*énigme*）ないし両義性のうちで自らを現すと論じている（Levinas 1964: 213）。

確かに＜他人＞の表出には言語が援用されるが、その言語はギリシア的ロゴスにおける言語と同格ではなく、＜他人＞からの「呼びかけ」において、そのロゴスから逸脱する謎として現れる。これがレヴィナスからデリダへの、1点目の指摘に対する応答である。

2点目については、主に「全く別の仕方でも—ジャック・デリダの哲学について」と題された論文で触れられている。

レヴィナスは、デリダによるフッサールの観念論批判＝「現前の形而上学」批判に同意する。しかし彼は同時に、差延として記号を捉え、現前の「欠損」を

肯定的に語ろうとするとき「それは依然として、肯定性と同一視された現前へと舞い戻る一つの仕方なのではないだろうか」(Levinas 1976/1994: 87/93-94)という問題を提起している。現前の欠損は、結局のところ現前する存在を前提にしており、存在論の範疇＝＜語られたこと＞＝「何」性の次元に留まっている。

しかしながら記号は、先の1964年の私信でも触れられていたように、「他者への曝露、他派への服従という常軌を逸脱した出来事であり、現前に逆行する出来事」(Ibid.: 88/94)であり、「置換＝身代わり、代補、あるものが他のものの代わりとなること、それは他者への私の責任としての「他のために」」である。

「記号は＜語られたこと＞のような仕方では始まらない」(Ibid.: 88/95)。記号は＜語ること＞＝「誰」性としての＜他者＞への曝露のうちで始まる。

以上のように、レヴィナスはデリダによる「現前の形而上学」批判および「差延」戦略を受容しつつも、記号ないし言語がその「呼びかけ」において運んでくる「謎」の現れ、つまり＜語られたこと＞において汲み尽くされざる＜他者＞への曝露を認める点でデリダから距離を取っている。レヴィナスが『存在するとは別の仕方、あるいは存在の彼方へ』の「前置き」で、「essence」の動詞的性質を強調するために«essance»と表記してもよかったが、あえてそうしなかったと述べているのは、「本質」と「存在すること」の二義性を示す(第1節参照)ことに加えて、自らのデリダとの微妙な距離感を踏まえてのことだったと考えられる。

第3節 存在論的差異とは別の差異を示す«essence»

前節までで、「存在すること＝本質」である«essence»の字義と、その宣言の背後にあるデリダとの関係を確認した。本節では、以上の内容を踏まえつつ、再び「存在の思考と他なるものへの問い」に立ち返り、「essence»がいかにして存在論的差異の両義性とそれとは別の差異を指示しているかを考察する。

デリダは現前の欠損—現前から逃れ去る差異—を論じたが、その欠損ないし不在も、結局のところ存在を前提にしている。この論難を踏まえ、レヴィナスはデリダとは別の仕方、絶対的に他なるものの差異について思考している。

絶対的に他なるものとの関係は、「2つの項が相互に外在的である」ような関係であり、逆説的だが「あらゆる関係が排除された時の関係」である(Levinas

2000/1997 : 182/224) 。その関係は、志向性において想定されているような「…
…についての意識」の相関関係とは全く別の影響作用—情状性である「無関心で
はいられないこと」 (Ibid. : 183/225) である。

その関係とは、不可視なものによって影響されることであるが、不可視な「も
の」との関係ではない。影響される不可視なものは、いかなる仕方においても主
題化されず、表象されず、命名されないほどに不可視なのである。

したがって、その関係はレヴィナスが「実詞化」 (hypostase) と呼ぶ出来事
(Ibid.) —<私>の定立、休息、存在すること (≠存在するもの) —から区別さ
れる。絶対的に他なるものとの関係は、<大地>への休息としての「存在するこ
と」と存在者との差異および両義性をも越えた「思考の彼方」から到来する<他
者>からの呼びかけ＝「謎」 (énigme) (Levinas 1964: 213) による影響作用で
あり、<語られたこと>において汲み尽くされざる<他者>へ曝露されるとい
う受動性である。それは単なる受動性ではなく、いかなる意志においても受け止
めることができないような、受動的であらんとする意志すら置き去りにするよ
うな、あらゆる意味で最も受動的な受動性である。

こうした至高の受動性における関係を、レヴィナスは「隔時性」 (diachronie)
(Levinas 2000/1997 : 183/225) と呼ぶ。<私>が存在すること、その出来事が織
りなす<現>から逃れ去る<他者>。この<私>と<他者>の間には、<現>
の意識からは逸脱する、絶対的に隔たった<過去>との関係 (なき関係) がある。

観念論哲学の伝統において、「己自身と身の丈が釣り合わないような問い」
(Ibid.:186/227) は主観的なもの、病的な夢想の産物と見なされていた。だがそ
うした問いは、己の中の欠如に向けられているのではなく、むしろ己の彼方を思
考しているのではないか、とレヴィナスは問いたです。

彼方を思考する問いは、己の存在に対する問いと応答—「存在すること」—
に先んじて、その問いが生まれいずる彼方の場、隔時的<過去>としての無限な
る<他者>に向けられている。この<他者>の無限は、宗教的な意味での神に象
徴されるような果てしない高みにある絶対的無限ではなく、「有限者の中の無限」
(l'infini dans le fini) (Ibid.) であり、その表現における「の中の」がとる姿、
あるいはそれが結ばれる結び目から聴取される呼び声である。

だとすればこの「有限者の中の無限」たる<他者>はいかにして聴き取られ
るのか。<大地>に休息・定立し、「存在する」<私>が、己と身の丈が釣り合

わない<他者>に対して絶対的に受動的な仕方では影響されるのだとすれば、それはなぜなのか。「essence」において存在論的差異とその両義性、そしてさらに別の差異—倫理的差異—が指示されるのだとすれば、「存在すること」ないし休息・定立という出来事と同時に/その裏で、「存在すること」から逸脱する<他者>から影響を受けるという別の出来事が刻印されていなければならないが、それらの同時的な出来事はどのように生じているのか。

第4節 リクールが示す「誇張」の3つの位相

本論の核心をめぐるこの問いに解を与えるために、以下ではレヴィナスが「誇張的表現」と呼ぶ自己のあり方について考察する。

「存在すること」それ自体の経験とは、「誇張的に自己定立する」(Ibid.: 176/216) ことであるとレヴィナスは言う。「存在の誇張」とは、通常の志向性における意味作用の誇張として、その志向性を可能にする自己そのものを<他者>に露出する「自己露出」(s'exposer) ないし「自己現出」(s'apparaître) に至る営みである。

この「誇張」の状態をより仔細に理解するために、ここではリクールにおける『存在するとは別の仕方』読解を整理する。

リクールは、レヴィナスとともに現象学を学び、「言語」を中心としたレヴィナス論を多数発表した。それらの著作の中で、以下では特に『別様に—エマニュエル・レヴィナスの「存在するとは別様に、または存在の彼方へ」を読む』における「誇張法」解釈を取り上げる。

リクールの読解を整理すると、『存在するとは別の仕方』における「誇張法」は3つの種別に分類できる。

「誇張」とは主体の存在定立において<他者>に己の身が曝されることだが、その<他者>の声—<語られたこと>のうちで<語ること>のこだまが聴こえるのは、両者の隠された相関関係の「ひび割れ」においてのみである。その「ひび割れ」とは、己を露わにすることなく<私>に命令する<他者>の切迫（「近きもの」le prochain）である。通常の志向的關係による<私>と他なるものの結合關係から「逸-脱」ex-cession する「極端なもの」l'excessif としての<他者>は、<私>に対して「極端に」切迫し、ついに<私>がその身代わりとなるに至

る(Ricœur 1997/2014 : 23/31)。これが第一の「誇張」である。

この第一の誇張を「裏切る」形で、第二の誇張が起こる。〈他者〉は「近き者」として〈私〉に応答を迫り命令を与えるが、その命令が意味作用として働くには、この〈他者〉の切迫が第三者の世界に開かれ、普遍なる地平の上に位置付けられなければならない。ここに、不可視な「顔」を持つ〈他者〉を可視的次元に位置付ける正義の運動、意味作用の運動がある(Ibid.: 33/42)。これが第二の誇張—誇張に対する誇張である。

万物の意味作用は、その地平を与える「神の名」—主題化されることなく意味する名であり、万物の名に意味を与える—によって開かれる(Ibid.: 36/44-45)が、それで万事が最終解決されるわけではない。〈語ること〉は、〈語られたこと〉との相関関係のひび割れからしか聴取されず、すぐさまその相関関係の檻に閉じ込められる宿命にある。従って神の名において可能になる意味作用もまた、すぐに解体され無意味へと落ち込む可能性に開かれている(Ibid.: 38-39/46-47)。〈語ること〉が聴き取られる誇張は、〈語られたこと〉の次元に置かれる「裏切り」を経て、その意味作用にすら裏切られるという、裏切りの裏切りに至るのである。これが第三の誇張である。

とはいえ、この3つの誇張は、段階的に進んでいくものとみなすべきではない。話の筋としては第一の誇張の上で第二の誇張が語られるが、第二の誇張は第一の誇張の中に既に埋め込まれている。また第三の誇張も、第二の誇張の中に既に埋め込まれている（意味作用の現出は無意味化の作用から切り離せない）。

従って、リクールの言に従うならば、この3つの誇張は、存在することの「自己露出」、「自己現出」の3つの位相として理解すべきである。だとすれば、存在することの裸出は、いかにして①〈他者〉の切迫、②第三者および正義への開示、③無意味への解体に至っているのか。その関連を捉えなければ、「essence」という宣言の意味を十分に理解することはできないだろう。

第5節 «essence»における3つの誇張の生起の仕方

この問題を考えるための糸口をレヴィナス自身の著作の中に求めるとすれば、筆者の調査の限り、それは「解釈学の彼方」と「新しい意味での気遣いのない欠陥について」、そして『存在するとは別の仕方』第5章第4節「意味と『あ

る』」において見出される。

「解釈学の彼方」においてレヴィナスは、「存在すること＝本質」の定立を表象＝再現前化 (re-presentation) によって育まれるものとして提示している。そしてその定立 (position) は隠されたものの露出 (ex-position)、開示、現れ、現象へと送り返されると主張する。

「定立」から「露出」への移行は単なる品位の低下ではなく、まさに「誇張」であるとされている。そこで以下では、上記の3つの文献を精査し、この「存在すること＝本質」(essence) がいかに「誇張」され、いかに「露出」へと至るかを整理して、この問題に対する仮説の提示を試みる。

「存在すること＝本質」のエネルギーは、「表象＝再現前化を通じて、己自身に立ち返り、己自身を満たし、フッサールが述べるように己自身に同一化する」(Levinas 2000/1997: 160-161/198)。

この現前と再現前によって、意識は不断に現前と関わる。しかしこの時、意識そのものは、現前する存在者に場所を空けるために、自らの身を退いている。

「存在すること＝本質」において意識は現前・再現前と同一化するが、前一反省的な意識、「生きられた」(vécu) 意識は、黙して語らないまま、志向性の対象圏域から立ち退いている。

「存在すること＝本質」のエネルギーたる表象＝再現前化は「己の尺度に合わせてそれが思惟しているものと再結合する」(Ibid.: 163/201) のだが、一方で「己を同一なるものとして繰り返し見出す意識」(Ibid.: 164/202) は「己の尺度に合わせて思惟する魂のこの均衡を破って、己の容量を超えるものを了解する」(Ibid.) と指摘されている。

この反転は何を意味するのか。「新しい意味での気遣いのない欠陥について」では次のように述べられている。

「人間の自身性 (ipseite) は、自分の意味を「そこに存在すること」(être là)、 「そこ-である」(être-le-là) から汲み出し、世界内存在として繰り広げられる。然るに、「現存在＝そこに存在する」とは「存在しなければならない」(avoir-à-être) に帰着する一つの仕方である。「存在しなければならない」。それが「本質＝存在すること」である」(Ibid.: 81/98-99)。

「「存在しなければならない＝存在すべき何者かを持つ」(avoir-à-être) の「持つ」という語によって示される「所有＝固有性」(propriété) は「存在しなけれ

ばならない」の前置詞 à に含まれている存在することの強制の—死ぬまで逃れることのできない—忌避不可能性と釣り合っている」 (Ibid.: 81-82/99-100)。

「「本質＝存在すること」は「存在しなければならない」現存在による「私有化」として、すなわち「出来」として、「問われていること」に即して営まれることになる。こうして、人間は、己の人間性と己の自身性の意味を、存在の「出来」を分節することを通じて汲み出していくのである」 (Ibid.: 82/100)。

上記 3 つの引用部を踏まえると、「己の尺度に合わせて」思惟する表象＝再現前化から「己の容量を超えるもの」の了解への反転は、少なくとも 2 つの位相を有していることがわかる。

この反転は、第一に、「存在すること」が「存在しなければならない＝存在すべき何者かを持つ」(avoir-à-être) こととして誇張され、その存在への不可避性が重荷としてのしかかる経験の覚知を含んでいる。

第二に、その「存在すべき何者か」が重荷として経験されるとき、自分自身には担いきれない法外な何か、<私>の前に現れる。存在することとは自らの存在を問う—そして表象＝再現前する—ことだが、そこでは自らの問いの容量に収まり切らないような経験がある。その経験こそ、「己の尺度に合わせて思惟する魂のこの均衡を破って、己の容量を超えるもの」の了解であり、そのものによって「問われていること」—何者かから、自分には所有しきれないものを押し付けられること—の経験である。

この 2 つ目の位相の経験は、リクールが指摘した「誇張」の 3 つの次元のうち、①<他者>の切迫、②第三者および正義への開示 (※特に「神」への開かれ) の 2 つを既に含んでいる。

まず<他者>の切迫については、自分の存在を引き受けようとするときの挫折、引き受けられないような重さのものを押し付けてくるように「迫る」<他者>の現れとして理解できる。

とはいえこの挫折の経験だけでは、その<他者>の他性を了解することができない。ここではあくまで所有の失敗が経験されているだけであり、所有の不可能性までが了解されているわけではないからである。

極めてエゴイスティックだったはずの「存在すること」の運動は、誇張に誇張を重ね、背負いきれない何かを押し付ける<他者>への欲望 (「愛」 (Ibid.:167/206)) に向かう。自らの存在の引き受けの挫折を経て、それでもな

おその法外な重荷を背負おうと欲望するとき、人はまさにその重荷の無限性という本質を知る/知らされる。

〈他者〉の切迫は、志向性における日常的な意味理解の彼方として現れるものだったが、その切迫に向き合うとき、その〈他者〉の「意味」—無限性としての「神」—が理解されるのである。言い換えれば、意味の彼方において、「意味作用を可能にする」神の名という超越的意味が証し出されるのである。

では、リクールが示す最後の次元—「ある」へ回帰する恐怖—は、「存在すること＝本質」(essence)の運動との関連においてどのように理解できるか。この点については、『存在するとは別の仕方』の第5章第4節「意味と『ある』」を参照しなければならない。

「存在すること」の引き受けられない重さを無限性として知る/知らされる経験において、無限性の意味は常に無意味性と共にある。「意味が無意味によって凌駕される時、[中略]その底なしの受動性のうちで、感受性、〈自己〉は純粋な痛点として、内存在性の我執からの超脱として、存在することの転覆として告知される」(Levinas 2014/1999: 255/372)のであり、「さもなければ、能動的引き受けによって、存在するとは別の仕方での受動性は能作と相関関係を有することに」(Ibid.)なるからである。

あらゆる意味をも凌駕する無意味こそ、レヴィナスが「ある」(il ya)と呼ぶものである。無意味と言っても、それは「調和的でかつ無害な融即」(Ibid.: 254/370)とは全く異なる。この「ある」は、「どんな沈黙をもみたまえざる呟き」(Ibid.)に他ならない。

「存在すること＝本質」は、表象＝再現前化の働きによって、自らを現前された表象と同一化する運動のエネルギーであるが、この運動は自らが「ある」世界の不断のざわめきを統制し、「存在する」自分自身を中心として再構成する働きでもある。そこで主体は、いわば「ある」の無数の音を奏でる指揮者のように振る舞う。

「存在すること＝本質」の誇張によって、自らが引き受けられない重荷を押し付けられるということは、この〈私〉による指揮が破綻してしまうという経験、すなわち〈私〉を中心として統制され、全体として意味を持っていた音が再び「ざわめき」として無意味化するという経験を意味する。

この無数の音のざわめきは、しかし単なる無意味でもない。「ある」のざわめ

きは、意味から剰余された無意味として、「存在すること＝本質」の表象＝再現前化の営みからの剰余、無限なる大きさを持った法外な剰余におけるその法外さ、無限さを「意味」している。その「意味」で、「ある」は「他性の全重量」（Ibid.: 255/372）であり、「存在すること＝本質」の権能は「ある」によって挫折させられるが、「存在する」運動の中で＜私＞が欲望している果てには、必ず「ある」があるのである。

結論と今後の研究課題

序論に掲げた通り、本論の課題は、「レヴィナスが『存在するとは別の仕方』の前置きで宣言している『存在すること』としての«essence»使用は、いかにして、どのような点において、存在論的差異と、さらに別の差異の提示となっているのか。なぜ«essence»という語によって、それらの差異を示す必要があったのか」という問いに対して、本書および同時期に書かれたレヴィナスの諸論文の読解を踏まえ、一定の仮説を立てることにあった。

各節の内容を基に、この課題に対する本論を通じての解答を端的に要約すれば、次のように言える。

1. 【なぜ«essence»＝「本質」が「存在すること」の意味で使用されているのか？】

«essence»が、その原語（ousia）の意味を踏まえる形で「存在すること/本質」として宣言されているのは、「存在するもの」から区別される＜私＞の定立＝「存在すること」が、万物の意味の根源＝本質だからである。

2. 【なぜ«essence»は«essance»ではないのか？】

«essence»はその動詞性を強調するために«essance»と表記してもよかったが、レヴィナスはあえてそうしなかった。それは、デリダの「現前の形而上学」批判に同意しつつも、＜語られたこと＞の次元で現前の欠損を語るデリダとは別の仕方、言語における思考の彼方の「謎」、＜語る＞「誰」性の現れ＝＜他者＞への曝露に向かおうとしたからである。

3. 【存在論的差異とは別の差異＝倫理的差異とは何か？】

<他者>への曝露とは、絶対的に受動的な仕方、実体として認識不可能なものから影響を受けることである。しかし、<大地>に休息・定立し、「存在する」<私>が、その「存在する」という出来事と同時に、<他者>に対して絶対的に受動的な仕方、影響されているのだとすれば、それはなぜなのか。

4. 【存在論的差異と倫理的差異を繋げる「誇張」とは何か？】

「存在すること」において<他者>から絶対的に受動的な仕方、影響を受けるようになるということは、リクールによれば「存在の誇張」=自己そのものを<他者>に露出する「自己露出」ないし「自己現出」に至る営みとして解釈できる。この誇張は、①<他者>の切迫、②第三者および正義への開示、③無意味への解体という3つの位相を有している。では、「存在すること=本質」の運動は、いかにしてその3つの誇張の位相と関連しているのか。

5. 【誇張の3つの位相はいかにして生起するか？】

「存在すること=本質」とは、自らの存在を所有し、その重荷の引き受けを拒否できないということの意味している。自らの存在が重荷になり、その所有が挫折されるとき、その重荷が誰かに押し付けられてくるように感じる。ここに、①<他者>の切迫がある。そして、どれだけ尽力してその重荷を背負おうとしても不可能であることが理解されるとき、<他者>が無限なるものとして意味理解され、②第三者および正義への開示へと至る。だがその意味は無限であるがゆえに、③一度現前した当の意味を解体して「ある」へと回帰させる。「ある」こそが、<他者>を<他者>たらしめる他性の根源なのである。

以上の通り、本稿では«essence»の字義的解釈を踏まえ、この言葉のうちでいかにして存在論的差異と倫理的差異が織り込まれているのかを考察した。

第4節と第5節で示した通り、存在論的差異と倫理的差異は「存在の誇張」によって表裏一体をなす。「存在の誇張」とは表象=再現前化である「存在すること」の運動の過剰であるが、ではなぜ「存在すること」の運動は過剰になるのか。自らの存在が法外な重さとなって現れたとしても、それでもなお背負おうとするのはなぜなのか。そこには「愛」=<他者>への欲望があるとされるが、この「愛」とはいかなる働きをするのだろうか。自らの存在することへの愛は、<

他者>への欲望としての愛とどのように結びつくのか。あるいは、その関連こそが「誇張」であるのか。

「存在の誇張」を生起させる愛に関する上記のような諸問題を解明することを今後の研究課題として設定し、以上を持って本稿を閉じる。

文献一覧

Cornell, Drucilla (1992) *The philosophy of the Limit*. Routledge. (澤里岳史ほか訳 (2007) 『限界の思考』お茶の水書房。)

Davis, Colin (1996) *Levinas : An Introduction*. Polity Press. (内田樹訳 (2000) 『レヴィナス序説』国文社。)

Levinas, Emmanuel (1964) «Deux lettres d'Emmanuel Levinas à Jacques Derrida», in Cohen-Lévinas, Danielle (2011) *Lire Totalité et Infini d'Emmanuel Levinas : Études et Interprétations*. Hermann, pp.213-217.

Levinas, Emmanuel(1976) «Tout Autrement: sur la philosophie de Jacques Derrida», in *Noms Propres*. Fata morgana, pp.82-89. (合田正人訳(1994)「ジャック・デリダ/全く別の仕方」『固有名』みすず書房、83-96頁。)

Levinas, Emmanuel (2000) «De la déficience sans souci au sens nouveau» in *De Dieu qui vient à l'idée*. Librairie Philosophique J. Vrin; 2e édition, pp.77-89. (内田樹訳 (1997)「新しい意味での気遣いのない欠陥について」『観念に到来する神について』国文社、94-110頁。)

Levinas, Emmanuel (2000) «Herméneutique et au-delà» in *De Dieu qui vient à l'idée*. Librairie Philosophique J. Vrin; 2e édition, pp.158-172. (内田樹訳 (1997)「解釈学の彼方」『観念に到来する神について』、国文社、195-212頁。)

Levinas, Emmanuel (2000) «La pensée de l'Être et la question de l'Autre» in *De Dieu qui vient à l'idée*. Librairie Philosophique J. Vrin; 2e édition, pp.173-188. (内田樹訳 (1997)「存在の思考と他なるものの問い」『観念に到来する神について』国文社、213-232頁。)

Levinas, Emmanuel (2002) *De l'existence à l'existant*. Librairie Philosophique J. Vrin; 2e Édition. (西谷修訳 (2004)『実存から実存者へ』ちくま学芸文庫。)

- Levinas, Emmanuel (2004) *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence. Le Livre de Poche*. (合田正人訳(1994)『存在の彼方へ』講談社学術文庫。)
- Marion, L. Jean (1977) *L'Idole et la distance. Cinq études*.
- Marion, L. Jean (1993) Note sur l'indifférence ontologique, in *Emmanuel Levinas. L'Ethique comme philosophie première*. Cerf, pp.47-62. (高橋聡一郎訳(1997)「存在論的無差異についての覚書」『思想』874、85-102頁。)
- Ricœur, Paul (1997) *Autrement. Lecture d'autrement qu'être ou au-delà de l'essence d'Emmanuel Levinas*. Presse Universitaire de France. (関根小織訳(2014)『エマニュエル・レヴィナスの「存在するとは別様に、または存在の彼方へ」を読む』現代思潮新社。)
- 有馬善一 (2012) 「ハイデガーにおける存在の問いの再検証」『経営情報研究』19(2)、93-107頁。
- 関根小織 (2007) 『レヴィナスと現れないものの現象学—フッサール・ハイデガー・デリダと共に反して』晃洋書房。
- 土橋茂樹 (2009) 「バシレイオスのウーシア—ヒュポスタシス論」『中世思想研究』(51)、25-41頁。
- 野村宗央 (2022) 「Paradise Lost における essence の意味」『言語文化研究』41(2)、57-74頁。
- 服部敬弘 (2022) 「レヴィナスとフランス思想」『レヴィナス読本』法政大学出版局、196-205頁。
- 吉永和加 (2016) 『他者の逆説—レヴィナスとデリダの狭き道』ナカニシヤ出版。